

グライスにおける語用論的プロセス

——推意に関するもう一つの誤解——

三木那由他*

1. 序論

現代の語用論は、ポール・グライスの推意 (implicature) の理論に多くを負っている。推意の理論は体系的な語用論という営みの出発点であり、いまや多くの語用論者、意味論者にとってもっとも基本的なツールの一つとなっていると言えよう。しかし他方で、グライス自身の実際の議論や主張に関する反省は欠いたまま、推意というアイデアだけが便利な概念として独り歩きしているという側面も否定できない。

こうした状況を踏まえて、ケント・バックは「推意に関する誤解トップ 10」をまとめ、推意という概念の独り歩きに警鐘を鳴らしている (Bach, 2005)。本稿では、バックがまとめた「誤解」を紹介したり、彼の議論を検討したりということはしない。むしろ、推意に関する誤解のリストにさらに一つの項目を付け加えるというのが本稿の目標だ。それは、「推意は命題に対する操作によって導出される」という誤解である。

この誤解は単にグライスの解釈として誤っているだけでなく、いくつかの帰結を伴っている。第一に、この誤解に基づいて意味論的過小決定性がグライスにとって決定的なものだと見なされてしまっている。第二に、この誤解のゆえに、グライスの理論が持つ重要な特徴が見過ごされ、関連性理論のような現代の語用論理論との大きな違いがわからなくなってしまう。本稿ではこの誤解を解消することで、グライスの理論をアクチュアルな思想として取り戻すことを目標とする。

本稿は次のように構成されている。まず次節で、推意という現象の紹介を行なう。グライスによる推意の説明についても、論者たちのあいだでおおむね解釈が一致している点に関してはこの節で解説する。続く第2節で、グライスの推意の理論に対する従来の解釈を概観する。第3節では従来の解釈の誤りを指摘し、グライスの議論に則してより妥当な解釈を提示する。そうした妥当な解釈が持つであろういくつかの帰結を、第4節で検討する。

2. 推意

推意とはいわゆる言外の含みのことであり、会話において話者が直接は述べていないのだが、間接的に仄めかしている内容を指す⁽¹⁾。次の例を見てみよう。

(1) A: 『アーティスト』って面白いのかな。

B: 犬が出ている映画にはずれはないよ。

このとき、Bの発言は直接的には「犬が出ている映画がつまらないということはない」と述べているだけであって、これはAの質問に対する答えとはなっていない。だが、BはAの質問とまったく無関係な思いつきを口にしたのではない。むしろBは『アーティスト』は面白いということ（および『アーティスト』には犬が出演しているということ）を間接的に伝えることで、Aの質問に答えているのである。これは決して珍しい現象ではなく、私たちは日常会話においてしばしばこうした言外の含みを利用している。このような現象を、グライスは「推意」と名付けている (Grice, 1975)。

グライスは単に推意という現象を発見し命名しただけでなく、推意に関する体系的な説明も試みている。グライスによると、推意は次のように定義される (p. 30)。

話者 S が p と言うことで q を推意とする iff

- (1) S は会話の格率、あるいは少なくとも協調原理を守っていると想定される。かつ、
- (2) この想定と S が p と言っているということが整合的になるには、 S は q と思っているのでなければならない。かつ、
- (3) (2) でなされている仮定が必要だと把握する能力が聞き手にあると、 S は思っている。

協調原理 (Cooperative Principle) とは、「発言がなされる段階において、自分が参加している会話が採用している目的や方向性に従った発言をせよ」とまとめられる原理である。そして会話の格率 (conversational maxims) に従うことが、結果的に協調原理に従うことになるかとされている。会話の格率には、量、質、関係、様態の四種類があり、それぞれ以下のようにまとめられている。

量の格率 1. 必要なだけの情報を持つ発言をなせ。

2. 必要とされるより多くの情報を持つ発言をするな。

質の格率 真なる発言をなすように心掛けよ。

1. 偽だと信じていることを言うな。
2. 十分な根拠のないことを言うな。

関係の格率 関係のある発言をせよ。

様態の格率 明瞭たれ。

1. わかりにくい表現を避けよ。
2. 多義的な表現を避けよ。
3. 簡潔たれ。

4. 順序通りに話せ。

例えば(1)では、関係の格率、および量の格率によってBの発話のもたらす推意が説明されるだろう。Bが関係の格率に従っているという想定を維持するためには、Bの発言は映画『アーティスト』に関わったものでなければならない。またAが質問をしている以上、Bが量の格率に従っているのならば、BはAの質問への答えを与えているのでなければならない。それゆえ、Bは『アーティスト』に犬が出演していること、および『アーティスト』は面白いということを推意としていることになる。

グライスによる推意の定義は、話者の発話から推意を導出する語用論的プロセスを特徴付けるものとなっている。それゆえ、グライスの推意の理論の骨子をこう言い表わすことができる。推意は、話者の発話をもとに、協調原理に基づく語用論的プロセスを経て導出される、と。

グライス自身の理論は、決して明確でもないし、言語理論に必要なだけの予測力を持つものでもない。その意味では、グライスの理論は極めて不十分なものととどまる。しかし、協調原理に基づく語用論的プロセスというこの発想は示唆的であり、多くの言語学者や言語哲学者がこのアイデアを参考にしている。現代の語用論はおおむね、グライスの理論を修正するか、グライスの理論を批判して代案を立てるかという仕方発展しており、いずれにせよこのグライスの理論が共通の下敷きとなっているのである。だがこうした過程で、グライスの理論に関するある誤解が生まれ、反省されることなく広まってしまっている。次節では、そうした誤解を含む、従来のグライス解釈を概観する。

3. 従来のグライス解釈

本稿で問題にしたいのは、グライスにおける語用論的プロセスが何を入力として受け取り、何を出力するのかということだ。これについて、従来の多くの論者は、話者が言っている内容に当たる命題（ないしその類似物）が入力となり、推意に当たる命題が出力となると考えているように思われる。この節では、そうした従来の解釈を素描し、その解釈のもとでグライスに指摘される意味論的過小決定性の問題を紹介する。

3.1 語用論的プロセスの特徴付け

この節では、まず代表的な論者として文脈主義のフランソワ・レカナティ、(折衷的)ミニマリズムのケント・バックを取り上げ、彼らがグライスにおける語用論的プロセスに関してどのようなことを述べているのかを見ていこう。それを踏まえて、彼らに共通するグライス解釈をあぶりだすのが本節の目標である。

レカナティは言語処理における聞き手の認知という側面に重きを置き、そうした観点から意味論的に決定される発話内容というものに疑念を示し、発話解釈のあらゆる段階に語用論的推論が関わっているとする文脈主義 (contextualism) という立場を採用している。レカナティの議論には、グライスにおける語用論のプロセスが命題を入力・出力としているという考えが明確に見てとれる。レカナティはグライスにおける言われていることという概念は語用論的な情報を含む内容を持たなければならないと論じるなかで、次のように述べている。

話者の言っていることに対して豊かで、時間的に制約された解釈を与えられるのでなければ、推意の導出は不可能になるだろう。それゆえ、グライスの図式においては「言われていること (what is said)」が推意を産出する二次プロセス [訳注：推意を導出する語用論のプロセス] の入力となる以上、グライスの図式を採用するなら [……] 言われていることが最小でない内容を持つことを認めるしかない。(Recanati, 2004, p. 45)

ここで重要なのは、レカナティが推意を導出するプロセスの入力は言われていることであると主張している点だ。さらにレカナティによれば、言われていることとは「表現された命題」であり、グライスの語用論のプロセスは命題を入力として受け取ると彼が考えていることは明らかだ。そして推意は「文脈依存的な命題」だとされている以上、レカナティの解釈においては語用論のプロセスの出力もまた命題となっている。

同様のことはレカナティと対立するバックにも見てとれる。バックは意味論という営みや発話の意味論的内容という概念を疑問視するレカナティを批判し、発話の意味論的内容という概念を擁護している論者である。バックは推意と異なる語用論的内容として隠意 (implicature) というものを提案している。そしてバックは、グライスがそうした区別をはっきりと意識していなかったのは確かだが、実はグライスの発言において推意と異なる語用論的内容ないしそれに関わる推論の存在が仄めかされていると考えている。そうした議論を展開する際に、バックは次のように述べている。

「強化」で、彼 [グライス] は言われていることの情報内容の増加を意味しているのであって、言われていることにまったく別個の命題を付け加えることを意味しているのではないように見える。(Bach, 1994, p. 272)

この箇所では強化と推意とが対比され、グライスがこれらを異なる語用論的プロセスに関わるものと考えていたと主張されている。バックは推意導出プロセスを「言われていることに別個の命題を付け加える」ものとしており、彼がこのプロセスを命題、あるいは少なくとも命題スキーマに対する操作と捉えていることをうかがわせる。

またバックは次のようにも述べている。

ともかく、隠意 (implicature) は[.....]言われていることの肉付け (fleshing out) か、もしくは書き込み (filling in) の問題である。[.....] これらがいずれも推意でないということに関してはグライスに対する批判者に同意しよう。だがそれらは、本来の意味での推意に関わるのと同種の語用論的プロセスに関わっているものであり、[.....] (ibid., 273)

隠意導出のプロセスは、命題スキーマ (バックの言葉では「命題根 (propositional radical) 」) に作用し、それに情報を加えて何らかの命題を生み出すものとされる⁽²⁾。例えば次の (2) では言われていることのレベルでは十分な命題的内容ではなく、命題スキーマしか表現されていない。この場合、十全な命題に達するために書き込みのプロセスが働き、それによってはじめて十全な命題が隠意として得られる。(隠意導出の過程で付け加わった情報を [] で示している。)

(2) 裕作は [出かける] 準備ができている。

バックによれば発話が十分な命題を表現しない場合には、常に命題スキーマに対してこうした隠意導出プロセスが働き、十分な命題が導出されることになる。命題スキーマに対しては常に隠意導出プロセスが働くのならば、推意導出プロセスが命題スキーマに働く余地はない。明らかにバックは、命題スキーマが入力された場合には隠意導出プロセスと推意導出プロセスが順に適用され、十分な命題がはじめて入力となる場合には推意導出プロセスのみが働くという図式を念頭に置いている。

バックはこれらの議論を単に自身の理論の提案ではなく、グライスに対する修正として論じている。つまり、バックは自身の議論がグライスの理論の延長線上にあるとしているのである。それゆえバックはグライスの理論においても推意導出プロセスは命題に対して働くと見なしていると推測してよいだろう。

本節でレカナティとバックを取り上げたのは、彼らが互いに互いを引用しつつ、はっきりと対立しているからだ。レカナティとバックはそれぞれが採用する立場においても、そしてグライスに対する解釈においても互いを批判し合い、明確に別の陣営に属

している。ここまでで見てきたように、これほど考え方の違う論者のあいだでも、グライス解釈に関してはある一点で意見の一致が見られていた。それが、グライスにおける語用論のプロセスは命題を入出力とするという点なのである。

レカナティとバックは、意味論的過小決定性の問題がグライスの理論にとって大なり小なり問題となることを認めるという点でも意見が一致している。実はこのことは、彼らに共通するグライス解釈と関係している。次節でこの点について見ていこう。

3.2 意味論的過小決定性の問題

意味論的過小決定性の問題とは、発話された文が持つ意味論的内容が命題を十分に確定しない事例にまつわる問題である。先に挙げた(2)はその一例だ。ほかにも、

(3) 貴志は背が高い。

のような別の対象と比較して初めて意味を持つ形容詞を含む事例も、意味論的過小決定性を示す。(3)では、小学生にしては背が高いのか、バスケットボール選手にしては背が高いのか、あるいは誰が特定のひとより背が高いのかといった比較対象が決まらないうと、明確な真理条件を持った命題が確定されない。従って、(3)の発話は、それ単独では命題を完全に決定することができていないのである⁽³⁾。

レカナティやバックはこうした事例がグライスの理論にとって問題となると見ており、それゆえに前者は言われていることという概念の放棄を、後者は隠意と推意の区別を提案している。意味論的過小決定性が問題となりうるのは、十全な命題に語用論のプロセスが関わるのなら、推意導出プロセスが働く前にすでに何らかの語用論のプロセスが作用していなければならないということになるためだ。

こうした議論に、先に述べた彼らによるグライス解釈が大きく関わっていることは明らかだろう。推意導出プロセスが命題に対する操作であるという解釈がなければ、そもそもこの議論は成り立たないのである。というのも、推意導出プロセスが命題ではない別の何かを入力として受け取るものであったならば、意味論的に命題が決定されない文が存在したとしても、そうした文の発話に対して推意導出プロセスを適用できないとする理由はないからだ。次節では、彼らの解釈が誤っているということを示し、よりもっともらしい解釈を提示する。

4. グライスにおける語用論のプロセス

この節では、まずグライスの議論をもとにレカナティやバックに代表されるグライス解釈(「命題入力説」と呼ぶ)の誤りを指摘する。そして、グライスの発言に基づき、よりもっともらしい解釈を与える。

4.1 命題入力説の誤り

命題入力説の問題としては、第一にグライスの重視する会話を「合理的な行動の特殊事例と見なす」(Grice, 1975, p. 28) 考えと調和的でないこと、第二に様態の格率に関わる現象がうまく扱えないことが挙げられる。これらを順に見ていこう。

4.1.1 合理的行動の特殊事例としての会話

グライスは会話と他の合理的行動との連続性を主張し、協調原理や会話の格率の類比物が会話以外の場面でも用いられているということを指摘している。例えば以下の箇所で、グライスは会話が「合理的な行動の特殊事例」と見なすことを自身の「目標の一つ」だとし、それゆえ会話の格率の類比物が「会話以外の交流の領域」にも見られると指摘しつつ、次のような例を挙げている。

あなたが車の修理を手伝ってくれているなら、あなたの行動が必要以上でも以下でもないものであることを私は予期する。例えばもしある場面で私が四つのネジを必要としているなら、私はあなたが二つでも六つでもなく、四つのネジを手渡しすることを予期する。[.....] (Grice, 1975, p. 28)

これは量の格率の類比物として挙げられている例である。グライスはこの個所に続いて、質、関係、様態の格率についても同様の例を紹介している。こうした議論から、上記の例における「相手が四つのネジを渡してくれるであろう」という推測が、語用論的な推測と同種のものであるとグライスが考えているのは明らかだろう。会話が合理的な行動である以上、その参加者は可能な限り格率に従って発言するはずだ。自動車の修理を共同で行うのが合理的な行動である以上、その参加者は可能な限り必要以上のことや必要に満たない行動を取らないはずだ。グライスは、こうした推測を同種のものと考えているのである。またグライス自身は指摘していないが、会話以外の領域において推意と類似した現象を考えることもできる。例えばグライスが挙げている例で相手が六つのネジを渡してきた場合、私たちは「本当は四つで十分だとわかっているのだけれど、ネジを落としてしまったときのことを考えて多めに渡してくれたのだろう」などと考える。ここには、表面上会話の格率が違反されて話者の推意を推測する場合と、類比的な推測が見てとれる。

命題入力説の問題は、こうした他の合理的行動とのパラレリズムを無視している点にある。もしグライスにおける語用論のプロセスが命題を受け取って命題を返すようなものであるとすると、先のネジの受け渡しのような事例と会話とのあいだに明確な類

似性はなくなってしまう。というのも、ネジの受け渡しは命題を表現してはならず⁽⁴⁾、それゆえそれについての推測も命題に関するものではないのだ。従って、語用論のプロセスを命題にもっぱら関わるものとする解釈は、会話は合理的行動の特殊事例であるというグライスの考えとは調和しないのだ。

会話を合理的行動の特殊事例と見なすという考えは、グライスにとって協調原理や格率といったものの自体の正当化にも深く関わる重要なものである。実際、グライスはこのように論じている。

この標準的なタイプの会話の慣例〔訳注：協調原理や会話の格率に従うこと〕は単にすべてのひと、ないし多くのひとが事実上従っているだけのものではなく、それに従うのが合理的で、それを捨て去るべきではないようなものなのだと考えたいのだ。(ibid., p. 29, 強調原著者)

飯田が指摘しているように、ここでグライスは会話が合理的行動であるということを根拠に、協調原理に対してある種の超越論的な正当化を望んでいるのである(飯田, 2002)。会話と他の合理的行動との連続性を確保しない命題入力説のもとで、同様の正当化が可能であるかは定かでない。ゆえに協調原理や格率の正当化という点でも、命題入力説は好ましくないのだ。

4.1.2 様態の格率

命題入力説は、様態の格率に関わる事例を理解困難なものとする。グライスは様態の格率の違反を利用した例として、(4)を挙げている(ibid., p. 37)。

- (4) a. X嬢は「ホーム・スイート・ホーム」を歌った。
- b. X嬢は「ホーム・スイート・ホーム」の楽譜に対応する音を発した。

グライスによれば、これらの表現は「同義」である。この場合、これらの発話は(標準的な命題観では)同じ命題を表現することとなる。すると、命題入力説に従うなら、(4a)と(4b)の発話によって引き起こされる語用論のプロセスは、同じ命題を入力として受け取ることになるため、これらが同じ文脈で異なる推意をもたらすことはない。だがグライスが指摘するように、(4b)の発話は通常(4a)にはない推意をもたらす。すなわち、X嬢は音痴であるなどといった推意だ。こうした振る舞いの違いは、推意導出プロセスの入力を命題と見る立場からは説明できない。

同じ問題は、様態の格率に関わる事例に一般的に生じることが予想される。というのも、様態の格率は物の言い方に関わる格率であり、同じことをあえて周りくどい言

い方で表現したり、曖昧な言い方で表現したりという状況に関わるものだからだ。従って命題入力説のもとでは、様態の格率の働きは不可解なものになってしまうのである。

さて、命題入力説がグライス解釈として誤っているという根拠を挙げてきた。しかし命題入力説が誤っているとすれば、正しいグライス解釈はどういったものなのだろうか。次節ではこのトピックを扱う。

4.2 行為に基づく心理帰属としての語用論的プロセス

グライスにおいて、推意を導出するプロセスはどのようなものなのか。本稿の与える答えは、それは行為を入力として取り、行為者に心理を帰属するプロセスであるというものだ。こうした解釈を取るべき理由の一つは、グライスの次の発言である。

推意は次の仕方で生じると考えられる。推意の内容 (implicatum) は次のいずれかの結果を保持するために、話者に帰属する必要のある心理状態ないし態度の内容である。(a) 話者による会話の格率の違反が、少なくとも話者にとって、状況的に正当化可能である、もしくは (b) 話者による会話の格率の違反に見えるものが、実は見せかけのものでしかなく、本当の違反ではない。[.] (Grice, 1987, p. 370)

このように、推意を導くプロセスは話者に帰属すべき心理状態を探し出すものであり、推意とはそうした心理状態の内容だとされているのである。

このことは、自然的意味と非自然的意味の関係をめぐるグライスの議論とも整合的だ。グライスは「あの黒雲は雨が降るであろうことを意味する」のような場合の意味をコミュニケーションが関与するような場合の意味（推意も含む）と区別し、前者を自然的意味、後者を非自然的意味と読んでいる。そしてそれはいずれも「 x が y を意味するなら、それは y が x の帰結であるという主張と等しいか、もしくは少なくともその意味するところの一部として含んでいる」(Grice, 1982, p. 292) としている。グライスは続く個所で非自然的意味を自然的意味から派生したものであると想定し、そうした派生の出発点として動物がうなり声を上げることで自分が痛みを抱えていることを意味するという事例を挙げている。これは自然的意味の一例であるが、その動物が実際には痛みを持っていないのにそうしたうなり声を意図的に上げるといったことを試みることで、非自然的意味が派生することになるとされる。

動物のうなり声の自然的意味の例において、私たちはうなり声からその動物が抱えている痛みを推測する。これがグライスの言う「帰結」の意味だ。つまりうなり声と

いう行動をもとにしたアブダクティブな推論によって痛みが帰結する場合に、私たちはそれらのあいだに意味関係を見出すのである。グライスは非自然的意味についても同様のことが成り立つと考えている。非自然的にあげられたうなり声の場合には、私たちはうなり声を意図的な行為だと解釈し、そうした行為をするに至った心理状態をアブダクティブに推論する。このとき、私たちはうなり声とその背後にある心理状態とのあいだに非自然的な意味関係を見出すのである。

私たちはすでに、グライスにとって協調原理や会話の格率に従うことは会話において合理的に行動することと同義であるということを見た。従って、協調原理や会話の格率を遵守している限り話者に帰属される必要のある心理状態とは、話者が合理的に行動している限りで話者が持つべき心理状態に他ならない。それゆえ推意導出プロセスとは、合理的な行為としての発話に対し、その背後にあるべき心理状態を導きだすプロセスということになるだろう。この解釈は、会話を合理的な行動の特殊事例と見なすという立場とも調和的である。

こうして、命題入力説とは異なるグライス解釈の妥当性が示された。次節において、この解釈が持ついくつかの帰結を示そう。

5. いくつかの帰結

グライスにおける語用論のプロセスは、話者の発話という行為を入力として受け取り、その行為の背後にある心理状態を出力するということを論じた。本節はこの解釈から得られる帰結について考察する。

5.1 意味論的過小決定性

レカナティとバックは意味論的過小決定性をグライスにとっての問題として捉える点で一致していた。しかし本稿の解釈では、意味論的過小決定性は必ずしも問題にはならない。というのも、推意導出プロセスが作用するためには、たと言われていることが十分な命題とならなくとも、話者が「何かを言う」という行為をするだけで十分だからである。そして十分な命題とならない内容を話者が言いうることに、大きな困難はない。実際グライスが言われていることの同定に求めているのは、(a) 代名詞の指示対象の決定、(b) 発話時点の決定、(c) 多義性の除去にすぎない。これらの条件は、言われていることが命題として十分な内容を持たずとも達成できるのだ。従って、言われていることが命題的である必要はなく、それゆえ表現されている命題が十分に決定せずとも何かを言うことは可能なのである (c.f., Bach, 2001)。

この関連で、ソームズが命題的態度に関して展開した議論を援用することができよ

う (Soames, 2010)。ソームズは一般に命題的態度と呼ばれる態度が、実際には個体と命題との関係とは解釈しがたいということを指摘し、構造化された命題スキーマを用いて命題的態度を分析するよう提案している。こうしたソームズの議論に従うなら、命題的態度は一般的に十分な命題を対象とするとは限らないものだということになる。これは、命題が確定しておらずとも何かを言うことはできるという上記の議論に対する一定のサポートとなるだろう。

意味論的過小決定性が生じている場合でも、話者が何かを言っているとするに問題はない。それゆえ、その場合にも推意導出プロセスは作用しうるのである。

5.2 行為の理論としての語用論

本稿の解釈は、語用論を言語から切り離す視点を可能にする。すでに述べたように、グライスにとって発話は合理的行為の一種であり、語用論のプロセスとは合理的行為者に対する心理帰属の一種であった。それゆえ、グライスにおいて語用論は行為の理論、もしくは心の理論の一部として捉えられることになる（実際、グライスは「意味の理論は哲学的心理学の一部である」としている (Grice, 1982, p. 283)）。

現代の語用論は、行為の理論ではなく、あくまで言語の理論の一部として展開されることが多い。すでに見たように、レカナティやバックは推意が命題にもっぱら関わるものとしていた。命題という概念自体は必ずしも言語表現とのみ関わるものではないが、彼らが文の意味としての命題というものを念頭に置いていたのは明らかだろう。彼らは言語現象にのみ着目して、語用論的分析を展開しているのである。同様のことは、関連性理論にも言えよう。もちろんスペルベルとウィルソンは非言語的な刺激が関わる事例にも目を向けている (Sperber & Wilson, 1986, 1995)。しかしあとに続くカーストンの理論では、言語表現がもたらす想定や言語表現にエンコードされた解釈指令などがもっぱら取り上げられ、言語的コミュニケーションにおける認知プロセスの分析として、関連性理論が展開されるようになっている (Carston, 2002)。

比較的扱いやすく、研究の蓄積もある言語的コミュニケーションに分析範囲を限定するのは、方法論的には妥当かもしれない。しかし、語用論が言語にのみ関わり続けるなら、言語と非言語的コミュニケーションの関係は見えてこないし、言語的活動のそもそもの成り立ちを探究することも困難となる。それに対し、語用論を行為の理論の一部として展開するグライスの理論には、そうした研究を可能にする、より広い視野が内包されているのである。

6. 結論

本稿ではグライスにおける語用論的プロセスに関する解釈について検討した。レカナティやバックに見られるように、グライスの語用論的プロセスはしばしば命題に対する操作だと受け取られている。本稿ではそうした解釈がグライスのほかの箇所での主張と整合的でないことを指摘した。グライスにとって語用論的プロセスとは、合理的行為としての発話を受け取り、その背後にある心理状態を導出するものなのだ。こうしたグライスの考えは標準的な語用論者とは異なる視野を与えるものであり、現代でもなお検討するに値するアクチュアリティをもつのである。

註

* nyt.miki@gmail.com

本研究の一部は科学研究費（特別研究員奨励費 No. 10J00734）によっている。

- (1) 本稿の「推意」は、正確には「会話の推意（conversational implicature）」を指す。
- (2) 実際にはバックは、最小の命題からより情報の多い命題が得られる場合にも隠意導出プロセスが用いられるとする。だが本稿の議論と深く関わらないため、これについては省略する。
- (3) もっとも、(3) のような文が十分に命題を決定するという立場も存在する (Chapman, 2001)。
- (4) ネジの受け渡しという行為を、あるひとがネジを四つ持っているという命題を真にすることであるなど考えることで、「命題的に」捉えることはできるかもしれない。だが、それでもやはりこうした行動と言語的発話は極めて異なったものであり続ける。なぜなら、後者は命題を表現するのみであって、それを真にするわけではないからだ。

文献

- Bach, K. (1994). 'Semantic Slack: What is Said and More,' in Tsohatzidis, S. L. ed. *Foundations of Speech Act Theory*, New York: Routledge, 267-91.
- (2001). 'You Don't Say?' *Synthese*, 128, 15-44.
- (2005). 'The Top 10 Misconceptions about Implicature,' in Horn, L. R. ed. *Drawing the Boudaries of Meaning: Neo-Gricean Studies in Pragmatics and Semantics in Honor of Laurence R. Horn*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company, 21-30.
- Carston, R. (2002). *Thoughts and Utterances*, Oxford: Blackwell.
- Chapman, S. (2001). 'In Defence of a Code,' *Journal of Pragmatics*, 33, 1553-70.
- Grice, P. (1975). 'Logic and Conversation,' in (1989). *Studies in the Way of Words*, Cambridge: Harvard University Press, 22-40.
- (1982). 'Meaning Revisited,' in (1989). *Studies in the Way of Words*, Cambridge: Harvard University Press, 283-303.
- (1987). 'Retrospective Epilogue,' in (1989). *Studies in the Way of Words*, Cambridge: Harvard University Press, 339-85.
- Recanati, F. (2004). *Literal Meaning*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Soames, S. (2010). *What is Meaning?*, Princeton: Princeton University Press.
- Sperber, D. & Wilson, D. (1986, 1995). *Relevance: Communication and Cognition*, Oxford: Blackwell.
- 飯田隆 (2002). 『言語哲学大全 IV：真理と意味』, 勁草書房。

〔京都大学大学院博士後期課程・日本学術振興会特別研究員〕